

政治的实践としての幼児教育

1960年代のレッジョ・エミリア市立乳児保育所・幼児学校に焦点を当てて

小玉 亮子^{*}・藤谷 未央^{**}

Early Childhood Education as Political Practice:

Focusing on Reggio Emilia in 1960's

Ryoko KODAMA・Mio FUJITANI

Abstract

Professor Peter Moss emphasized that the unique early childhood education created in Reggio Emilia is a public education system and Loris Malaguzzi, who made a significant contribution to Reggio Emilia's early childhood education system, was a civil servant. He states that early childhood education is first of all a political practice. The political practice here, he argues, is “to consider what each of us wants and to encourage reflection and debate, and to come up with solid answers to various questions.” How, then, has Reggio Emilia's early childhood education been created in concrete ways?

To discuss early childhood education as such a political practice, this paper examined the history of early childhood education systems in Reggio Emilia, focusing on the 1960s. As a result, three features were identified. These were the political activities by the mayor and council, the powers of the women's movement, and the participation of the citizens that created infant-toddler centers and preschools in Reggio Emilia. It is noteworthy that the citizens include children. The early childhood education thus realized was, above all, a practice that could only be established in the specific historical context of Reggio Emilia.

Keywords: Political Practice, Early Childhood Education, Reggio Emilia, Resistance, Women's movement

1 問題の所在

イタリアのレッジョ・エミリア市の幼児教育は、今では世界で最も有名な幼児教育の一つと言っても過言ではない。この幼児教育は、市全域に広がる市立（公立）の幼児学校でなされている教育実践であり、それを包括する教育システムであることに、特徴があることはこれまでたびたび指摘されてきた。

例えば、イギリスの教育学者のピーター・モスは、レッジョ・エミリアの幼児教育が公立の教育のシステムによるものであり、レッジョ・エミリアの幼児学校に多大な貢献をしたローリス・マラグッツィが「公務員」

キーワード：政治的実践、幼児教育、レッジョ・エミリア、レジスタンス、女性運動

* お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系 教授

** お茶の水女子大学大学院博士後期課程、日本学術振興会特別研究員 DC

であったことを強調する。その上で、「教育は第一義的に政治的实践である」と述べる。政治的实践とは「私たちが何を望むのか」を最初に考え、「さまざまな問いに関して、それを省察し、議論し、そして一定の答えを出すことを促す」ことであると論じる。さらに、ローリス・マラグッツィが述べた「私たちは教育を時代の診断に適したものにしなければなりません。この時代に何が起きているのか、世界の中で何が起きているのか、私たちが取り組まないといけない世界的課題は何なのか。こういったことに関わる教育に尽力しなければなりません」という議論こそ重要であると指摘する（モス & 佐藤 2020:18）。

ここでいう政治的实践とは、私たちの日常とはかけ離れた、私たちが会ったこともない人たちがテレビの向こうの議会で議論していること、あるいは、ネットニュースで討論しているいわゆる「政治談義」をさしているわけではない。もちろん、それらも政治ではあるが、ここでモスが言う政治的实践で問われるのは、私たち一人一人の「考え」と「行動」である。私たち一人一人にはそれぞれ「望む」モノやコトがあり、それについて、他の人々と意見交換していくこと、そしてそこでの重なりや違いを議論していくこと、そしてそれらを経て一定の選択をしていくことが政治であるというのが、モスの認識であると言えよう。

確かに、私たちは皆、何を選ぶべきか考え、そのために、他の人と対話し、マス・メディアの意見を目にし、望ましいと思う選択をする。私たちの毎日が、選択ないしは決定の連続であるとも言える。そしてマラグッツィのいう、「この時代に何が起きているのか」、そして、私たちの身近な周辺だけでなく「世界的課題」に尽力することという指摘は、単に陳列されたメニューから何かを選ぶことにとどまらないことを要求するものである。メニューから何かを選択することも政治であるが、そういったメニュー自体を、時代の課題に関わって作り出す、すなわち、アクションを起こしていくことを求める議論でもある。幼児教育という言葉を使うなら、私たちがどのような幼児教育を望むのか、そしてそれに関わることが、この時代の中にあって、世界的課題にどのように尽力していくことになるのか、そのために私たちは何をすることが必要なのか。そう言った問いに取り組んでいくことが政治的实践といえよう。

では、それは具体的にはどのようなになされてきたのか。以下では、このような幼児教育を政治的实践として検討するために、マラグッツィが取り組み、モスが評価したレッジョ・エミリアの乳児保育所・幼児学校の歴史に焦点を当てることとしたい。その際、注目したいのは、1960年代である。

レッジョ・エミリア市は、1963年、イタリア国内初の公立幼児学校としてロビンソン幼児学校を開設した。これは、イタリア国内の幼児教育がローマ・カトリック教会の統制下におかれていた中で画期的な出来事だった。その後自治体立の幼児学校は、1960年代に、イタリア北部中部の都市に拡大していく。さらにレッジョ・エミリア市は、1971年に0-3歳の子どもを対象とした市立乳児保育所であるジェノエッファ・チェルビィ乳児保育所を開設した。

こうしたことを鑑みると、レッジョ・エミリア市は、1960年代に、イタリア国内で先駆的に市立（公立）の乳幼児教育を打ち立て、推進してきた自治体であるといえよう。

2 先行研究と研究目的

レッジョ・エミリア市における市立幼児学校・乳児保育所の設立や、またその経緯について分析している日本における先行研究としては、佐藤学、里見実、星三和子、浜田真一らによる研究がある。佐藤学は、レッジョの教育は「ローマ・カトリック教会が独占していた保育を市立（公立）に開放し、幼児教育の公共圏を創出する闘いとして展開」したと述べる（佐藤 2020: 23）。里見実は、市立学校設立の経緯として、1940年代に女性運動が設立した学校が国の財政支援を受けることができず、自治体に移管され公立化したこと等の背景を指摘する（里見 2015）。星三和子は、第二次世界大戦中のファシズムとナチズムへの抵抗運動の力について言及したうえで、レッジョの「草の根の住民の力」が市立幼児学校を実現させたと述べる（星 2021: 102）。浜田真一は、佐藤や里見の研究を参照しつつ、レッジョの乳幼児教育が「市民たちによるオルタナティブな学校づくりに端を発する、ファシズムへの抵抗という政治的プロジェクト」であり、レッジョの経験が「常に政治的であ

り、社会運動そのものであった」と指摘する（浜田 2022: 237-255）。

これらの研究における指摘はいずれも、レッジョにおける市立学校の設置と社会状況との関係を扱っているという点で重要であり、本研究と視点を共有している。しかしそのうえで、レッジョにおける市立学校設立のプロセスについてはさらなる検討の余地が残されていると考えられる。というのは、佐藤学が指摘したように、「アメリカと日本の『レッジョ・ブーム』」において「コミュニン思想は両国の教育研究者と教師の政治アレルギーのために脱色され、表層的な技術主義に傾斜した導入が主流になって」（佐藤 2001: 502）おり、レッジョの乳幼児教育の背後にある「政治的ディスコース」は抹消され見失われてきたということがあるからだ。佐藤はレッジョについて、こうした「語られなかった語り」に目を向ける必要があると論じている（佐藤 2020: 23）。

そこで、本論文ではこれらの先行研究の指摘をふまえ、特にレッジョに公立の幼児学校・乳児保育所をもたらした政治的な動向について、歴史的な視点から分析を試みることとしたい。この分析の際に、レッジョ・エミリア市の幼児教育実践の歴史について書かれた重要な文献として、Preschools and Infant-toddler Centres- Istituzione of the Municipality of Reggio Emilia and Reggio Children, 2012, *One City, Many Children: Reggio Emilia, a History of the Present, Reggio Emilia: Reggio Children*. (Reggio Children 2012) という 2010 年にイタリア語で出版され、2012 年に英訳出版されている書籍に注目したい。この書籍は、レッジョ・エミリア市における乳幼児教育の誕生とその展開について、その始まりを 1860 年代のイタリア統一の時代にまで遡り、レッジョ・エミリア市の幼児教育の歴史を作ってきた多くの当事者の声と考えを集約した資料集という特徴を持つ。そしてこの書籍の中で、本書は自らこの幼児教育を作ってきた多くの当事者たちの声を集めたレッジョの「自伝」であるとも表明されている。さらに本書には、当時レッジョで市長職にあったレンツォ・ボナッツィによる『『夢のように素晴らしい』1960 年代』という証言が掲載されている（Reggio Children 2012: 88-89）。このことから、本論文が対象とする 1960 年代を、レッジョ・エミリア市の乳幼児教育にとって重要な時代であったとレッジョ自身が位置づけていることがうかがえる¹⁾。

本論文ではこの書籍を主要な検討対象としつつ、レッジョ自身が市の幼児教育の歴史をいかに捉えているのかを軸として、社会的な動向やそれをもたらしたものに注目する。そして、これが実現した社会的・歴史的なコンテキストから、なぜレッジョでは 1960 年代において、市立の幼児学校の設置が可能だったのかを探ることを目的とする。そして、そこでなされた政治的实践が、何を生み出すこととなったのか、その一端を明らかにすることを試みたい²⁾。

Reggio Children (2012) における 1960 年代に関する記述を検討したところ、レッジョにおける市立幼児学校・乳児保育所の設置の背景に関して、レッジョは大きく以下の 3 点を認識していたことが見出された。それらは第一に「市長・議会の役割」、第二に「女性たちの運動」、第三に「市民たちの関与」である。以下、順に論じていくこととする。

3 市長・議会の役割

まず、「市長・議会の役割」についてである。先に見たようにレッジョ・エミリア市では 1963 年に、イタリア国内で初となる公立幼児学校としてロビンソン幼児学校を開設した。この背景には市長と議会が重要な役割を果たしたのであるが、それを検討するにあたり、イタリアの歴史的コンテキストから当時の政治状況を見ておくことが必要になろう。

イタリアはムッソリーニの支配下で、第二次世界大戦に参戦したが、戦況の悪化とともに 1943 年にはムッソリーニは政府首長から解任された。その後、イタリアは連合軍との休戦協定をすすめ、連合軍の占領下に入る予定であったが、それを阻止すべくドイツ軍が直ちにナポリ以北の地域を占領する。この結果、イタリアは二分され、北部に位置するレッジョ・エミリアはドイツの支配下に入った。この北部の地域では、失脚したはずのムッソリーニを元首とするドイツの傀儡のいわゆる「サロ共和国」が成立した。この北部地域では、ファシ

ズムに対する激しいレジスタンスが行われた。レッジョ・エミリア市はレジスタンスを支えた拠点の一つであったとも言える。Reggio Children (2012) は、このレジスタンスに非常に重要な位置を与えている。この点については、「女性たちの運動」でも検討することとしたいが、レジスタンス勢力は、1945 年に一斉蜂起を行い、北部の自力解放を果たしたが、このことが、イタリアでは戦後のドイツや日本のような長期間の占領下とならなかったことの背景とも考えられている。

このレジスタンスによる北部イタリアの解放から、「レジスタンス神話」が生み出され、戦後のイタリアに大きな影響を持つこととなった。戦後生まれた共和国は、レジスタンスから生まれた共和国と位置づけられた。1945 年 4 月 25 日は、単なる終戦記念日ではなく、イタリアのファシストとナチス・ドイツからの解放記念日として共和国の主要な祝日となった。

その後、この神話の浸透は、それと相容れない歴史的記憶、例えば、戦時下で実施されたガス室等の問題の清算は済んだものとみなされることとなったり、戦時下のレジスタンスの戦いはイタリア内部の内戦という意味も持ち、相互に対して行使された暴力は戦後も引きずられていくこととなった。加えて、内戦というだけでなく、この戦いは、資本主義に対する社会革命という側面もあり、労働者や農民による運動も連動していたと言う指摘もなされていることにも言及しておきたい（伊藤 2016: 24-26）。

戦後、このような戦時下の問題を抱えつつ多様な対立の中で、それでもイタリアは次第に経済的な成長を遂げていった。それはちょうど、ドイツや日本が高度成長を遂げ、大衆消費社会へと向かっていったことと重なるものであったといえよう。経済が好転していく一方、政権は不安定で、その舵取りは困難を抱えていた。高度成長の牽引役となった北部の工業地帯は、南部から移動する労働者を吸収していったのだが、そこで顕になる格差によってさらにデモやストライキ、テロリズムといった騒乱の時代が導かれていったのであるが、「左翼勢力の伸長を反映して、抜本的な改革が行われた社会改革の時代となっていた」（伊藤 2016: 107）。とりわけ、中等教育人口の増加に伴って、高等教育を中心に、教育改革が唱えられたのが 1960 年代であった³⁾。

そういった時代である 1962 年から 1976 年にかけて、レッジョ・エミリア市長をつとめたのは先述のレンツォ・ボナツィである。Reggio Children (2012) の記述から、レッジョは、ボナツィ市政が、市立幼児学校と乳児保育所の設置にみられるように、レッジョ・エミリア市の幼児教育の発展に関して大きな役割を果たしたと考えていることがわかる。例えば、この本の 94 頁に掲載されている写真には「乳幼児サービスの統合と拡張を求めて。左から、ジャンフランコ・バグニ、ロレッタ・ジャローニ、ローリス・マラグツィ、マルティナ・ルスアルディ、レンツォ・ボナツィ市長。レッジョ・エミリア、1968 年」というキャプションがつけられている。そこではマラグツィと二人の女性とともにボナツィの姿が、また、89 頁の写真にもボナツィが確認できる。そして本文中では、ボナツィ市政の時代が、「市の乳幼児サービスの誕生と発展にとってきわめて重要だった」ということが、以下のように記されている⁴⁾。

レッジョ・エミリアでは、終戦以降共産党が第一党だった。1962 年、レンツォ・ボナツィは、社会主義・共産主義の評議会（市長が個人的に選出した閣僚）とともに市長に選出され、1976 年まで市を率いた。この時代は、市の乳幼児サービスの誕生と発展にとってきわめて重要だった。ボナツィ政権は、活発な文化的・政治的情勢の中で、市民の新たなニーズに鋭い関心を示した。（中略）コミュニティ全体の福祉や生活の質の向上を計画し構築することに細心の注意が払われていた。（Reggio Children 2012: 83）

そして、Reggio Children (2012) には、議会の動向に関する記述も度々登場する。1960 年代は、乳幼児サービスが不足する一方で「家庭が変化」し「家の外で過ごすことを望む若い母親が増えていた」（Reggio Children 2012: 99）という。そうした中、1962 年の市議会においては、女性の労働と乳幼児への公共サービスをめぐり、対立する議論が展開されたことが記されている。

1962 年 10 月から 12 月にかけて、市議会で 3 回長時間にわたってなされた、女性たちと仕事に関する論争

は象徴的である。この論争は2つの基本的な選択をめぐり行われた。イタリア女性連合(UDI)に加盟する政治的左派の女性たちは、共同の洗濯場から、マンションや団地の共用部分、保育所や幼児学校に至るまで、労働機会の均等をもたらすであろう低コストの共同コミュニティ施設を提供するよう求めた。他方で、カトリック界を代表する女性たちは、家庭に専念する女性のためにパートタイム労働を導入することを公然と提案し、これはイタリアでは初めての試みだと強調した。(Reggio Children 2012: 99)

すなわち、「イタリア女性連合(UDI)に加盟する政治的左派の女性たち」が保育所や幼児学校を含めた共同コミュニティ施設を求めたのに対して、「カトリック世界を代表する女性たち」すなわち、キリスト教民主党の女性たちは、家庭に専念する女性のためにパートタイム労働を導入することを提案したという。Reggio Children (2012)においては、この議論の詳細な記録までは記されていないが、結果的に、市は1962年、国の法律がない中で幼児学校の設立を承認している。すなわち、この政治的左派の女性が求めた乳児保育所や幼児学校が、認められる形になったのである。

ただし、Reggio Children (2012)には、このような対立だけではなく、市議会において党を越えた合意形成がなされていたことが合わせて記載されている。例えば「市議会の会合では、対立や立場の違いがあったにもかかわらず、学校に関する議論はしばしば全会一致で終わった」(Reggio Children 2012: 83)という記述や、「幼児学校の新しい『規則書』(Regolamento)は、さまざまな政治的立場に開かれた高度な参加型のプロセスを経て、1972年の市議会にて満場一致で正式承認された」(Reggio Children 2012: 100)といった記載に見ることができる。

さらに、幼児のための学校の名称をめぐり、市議会で議論が交わされたことについても記されている。

1962年4月19日に開かれた市議会では、これから設立される学校に関する規定について議論された。議事録には、特別に設置された委員会が「母親学校」という表現を公的に使用することを取りやめ、「幼児学校」に置き換えることを強く意図したことがはっきりと記されている。数十年たった現在でも、その理由であった「子ども期それ自体を教育的関心の中心に据えるという現代教育学の原則とより一貫性を持たせること、すなわち、子ども期は学校教育の対象ではなく学校教育の主体的な一部であるということ」は、画期的な意味をもっている。(Reggio Children 2012: 98)

このように市議会では、対立はありながらも、幼児学校や乳児保育所に関する重要な議論がなされ、合意に至っていた。レッジョは、議会が市立幼児学校・乳児保育所の設置に貢献したと認識していると考えられる。

4 女性たちの運動

第二に、女性たちの運動について論じる。Reggio Children (2012)の86頁「学校の誕生」というセクションに大きく掲載された写真がある。これは、1960年、レッジョ・エミリアで撮影された写真であるが、そこには、「7月の主役になった『ストライプシャツの若者たち』は、ファシスト復活の試みに反対するだけではなく、戦後の困難な社会状況、政治状況、経済状況を批判し、抗議していた」という解説がつけられている⁹⁾。このような一見、乳幼児の教育とは何ら関係のないように見える写真が、レッジョの自伝である Reggio Children (2012)において大きく掲載されていることは、市民運動を重視するレッジョの認識を象徴しているように思われる。

とりわけ Reggio Children (2012)には、女性たちの物語が数多く登場する。里見実によれば、1960年代後半のイタリアでは、南部から北部への人口移動、出生率の増加、女性の社会進出に伴い、特に都市部で保育施設の拡充が課題になっていたという(里見 2015)。当時、保育施設を管理する権限を持っていたのは、「全国母子保護事業団」という「ファシズム下で成立した半官半民の組織」であった(Reggio Children 2012: 100)。この全国

母子保護事業団は女性の母親役割を強調した団体で、そこでは、保育所は教育の場ではなく、困難な状況にある母子のために子どもを預かる場と考えられていた。このことによって、既存の学校の市営化や市立保育所の設立が妨げられていたのである⁶⁾。Reggio Children (2012)には、例えば「ファシズム時代から引き継がれ内務省が管理していた全国母子保護事業団は、保育所サービスを開設する権利を持ちながら、それらを開設することではなく、イタリアの中央国家政治の一部に見られる非効率な官僚制度を浮き彫りにしていた」(Reggio Children 2012: 84) というように、全国母子保護事業団に対する批判が何度も記されている⁷⁾。

Reggio Children (2012)が繰り返し強調するのは、レジスタンスに端を発する団体であるイタリア女性連合等の女性たちが、市立学校設立のため行動を起こしたということである。例えば「人々は、乳児保育所について国レベルの法を要求するとともに、乳幼児や母性にかかわるサービス（寄宿学校、施設、孤児院、サマーキャンプ、託児所など）を提供する公的・私的組織に対して視察・管理の権限を持っていた全国母子保護事業団の廃止を推し進めた」(Reggio Children 2012: 97)、そして、「レッジョの運動、特にイタリア女性運動は2つのことを要求した。一つは、1963年にやや場当たりの始まった市立幼児学校に関する、より総合的なシステムであった。もう一つは3歳未満児のため、乳児保育所サービスを追加することだった」(Reggio Children 2012: 100)とある。女性運動にかかわる組織としては、カトリック系のイタリア婦人センター(CIF)もあったが、Reggio Children (2012)における1960年代の記述では、左派であるイタリア女性連合(UDI)の記載が中心になっている。

本書には、以下のような記載もある。「つまり、自ら行動を起こしたのは女性たち、母親たち、労働者たちだった。彼女らは、自分たちのニーズに合った学校をつくるため」に行動した。そして「社会的なニーズと個人の緊急性は、最終的にはジェンダーの観点からも表現され、乳幼児のための市立学校の経験へと進んだ。

(中略)彼女たちはあらゆる宗派の地域や家庭を急速に巻き込んでいった」(Reggio Children 2012: 100)、「各学校の開校は、とくに女性たちによる達成と強力な市民参加の物語だった」(Reggio Children 2012: 110)と。こうして1971年、レッジョでは国レベルの法に先駆けて市立乳児保育所が開校することになる。

そして、Reggio Children (2012)の97頁に掲載されている写真には、「ONMI(引用者注:全国母子保護事業団)の廃止と乳幼児保育所を導入する法律の承認を求めて、UDIが推進した全国デモにおける、レッジョ・エミリアからの女性グループ、ローマ、1971年3月」というキャプションがつけられている。これは全国母子保護事業団の廃止と乳児保育所を導入する法律の承認を求め、レッジョの女性たちがローマでデモ活動をする様子である⁸⁾。

この写真は、実は、別の研究者によっても使用されている。ドイツの教育研究者であるザビーネ・リングナウバーは、上記で言及した女性たちにインタビューした証言記録を映像記録として作成しているが、そこでもこの写真が使われている。制作者のリングナウバーは、レッジョ・エミリアにおける女性たちの献身は、自主運営の託児所の設立当初から新たな教育学創成の出発点となったとして、女性たちの活躍を高く評価しているのであるが、彼女の作ったインタビュー映像においては、戦後になされた彼女たちの行動の背景が明らかにされている。

例えば、先に指摘したReggio Children (2012)の94頁にローリス・マラグッツィとレンツォ・ボナッツィ市長がともに会議の壇上に写っている写真では、彼らと並んでロレッタ・ジャローニとマルティナ・ルスアルディという二人の女性も壇上に座っている。その彼女たちは、リングナウバーのインタビューに答えて、戦後の活動の背景に戦時下のレジスタンスの経験があることを語っている⁹⁾。

例えば、ルスアルディは、映像の中で、レジスタンスの時代について次のように証言している。

この時代は、店に入ると大きな看板が掲げられていました。「この店で政治について話すことを禁じる」(中略)私たちの話はすべて秘密で、後でそれを実現できるように私たちの内に収めたのです。

私たちには何の権利もなかったのです。私たちは投票する権利、文化に対する権利、社会的平等に対する権利さえ知りませんでした。そこで、私たちの(パルチザンの)短いけれども有益な会合の中で、私た

ちは解放後にやりたいと思っているこれらの活動について話し合いました。

また、ジャローニは、少女の頃から戦時下の反ファシズム運動組織、「レジステンツァ」の「青年同盟」に参加して、地下で活動を行っていたと語り、戦後、若い女性の権利のために忙しく活動したと言って、戦後になって学校を作ったプロセスを語る中で以下のように述べている。

私が評議員になって 67 年に最初にやったことの一つが、子どもたちのために市立の学校を求めている人たち全員との会合でした。（中略）

市立の「学校」は、どれも闘いとったものです。「闘いとった」というのは、市立「学校」を望んだ親たちや市民たちが闘いとったものだからです。

これらの映像記録の中でなされた語りは、戦時下のレジスタンスとしての活動の中で、女性たちが自らアクションを起こすことを学び、その理想を実現するために活動してきたことを示すものであると言える。

女性たちの運動は、もちろん乳幼児教育に限定されるものではなかった。Reggio Children (2012)の中には、女性運動に関係する写真が数多く掲載されているが、その中には必ずしも幼児教育に直接関係のないものも多い。例えば「核軍縮のための女性世界会議」に関する写真もあり、この写真にはケニアやアルジェリアの代表者とともに、ロレッタ・ジャローニの姿がある（Reggio Children 2012: 87）。こうした写真が掲載されていることから、市民の運動、その中でも特に女性運動がレッジョにおける市立学校設立に強く関連しているという認識をうかがうことができる。

5 市民たちの関与

アクションを起こしたのは、市長・議会や女性運動だけではない。第三に注目したいのは、市民たちの関与についてである。Reggio Children (2012)には、自治体が市民とともに市立幼児学校と乳児保育所の設置に向けて取り組んだことが記されている。例えば、1962 年から 1966 年に「学校のための市評議員 (assessore)」であったフランコ・ボイアルディは、市立の幼児学校を設立する計画を実現させるために、まずはプレハブ造りの学校を購入し、それらを設置する状況に持ち込んでいったことを回想している。ボイアルディによれば、そのうちの一つがパストレンゴ通りに設置され、のちにロビンソン幼児学校と呼ばれるようになり、さらにもう一つがのちにアンナ・フランク幼児学校になったという（Reggio Children 2012: 90）。

そして県議会議員であったイオーネ・バルトリは、「私たちは県の評議員のヴェリア・ヴァッリーニと、住民組織がデモの終わりに集まる場所を提供した」（Reggio Children 2012: 95）と回想している。このように、当時自治体の評議員であった者や、議員をしていた者が積極的に幼児学校・乳児保育所のための運動に関与したという証言が記されているのである。さらに、Reggio Children (2012)には、幼児学校に関わる運動の様子を撮影した写真が掲載されているのだが、その写真に付された説明文には、「市立幼児学校における職員配置を求めた県庁前での抗議行動。教師、ケア補助者、調理師が共にデモを行い、市の評議員であったロレッタ・ジャローニも参加した」（Reggio Children 2012: 94）と記載されている。ここにも、抗議行動に評議員が参加したことが記されている。

ここで強調されているのは、市立幼児学校・乳児保育所の設立に尽力した自治体の人物の中に女性がおり、女性運動にも関与していたということである。それは例えば、「市や県・州にて、行政官となる女性の多くはイタリア女性連合のメンバーだった。彼女たちが、乳幼児のための公的かつ自治体立の学校を促進することになる」（Reggio Children 2012: 63）であったり、新しい学校を求めた女性たちを支えたのは「新しい福祉の形について議論を始めていた、市や州の行政機関や議会の女性たちだった」（Reggio Children 2012: 77）という記述に見ることができる。そしてさらに、「それぞれの学校の開校は、市民、なによりも女性たちによる粘り強い

要求の物語であり、『勝利』の物語だった。根本的な役割を果たしたのは、市議会や県・州の行政機関における女性行政官の存在だった。彼女たちは、地域に根ざした女性運動と緊密に連携し、新たなニーズに耳を傾け、女性たちや親たち・市民を、市立幼児学校システム、のちには乳児保育所システムを拡大するための戦いに参加させることができた」（Reggio Children 2012: 106）と記されている。

こういった市民の運動は、「コミュニティのアイデンティティを再生するという有機的なプロジェクトの一環として市立の乳幼児学校の設立が開始・発展し、それらを運営するという課題」（Reggio Children 2012: 89）を、もちろんローリス・マラグッツィがそれを牽引してきたのであるが、多くの市民たちが、議論に参加し、時には床に車座になって座って議論していくという、市民たちの運動や行動があったと言えるのではないだろうか。

そしてそこに、子どもたち自身も登場する。

ぼくたちの学校がロビンソン・クルーソーって呼ばれるのはね...、ロビンソンが冒険家で、とても、とても勇気があって、海に行くことに情熱をもやしていて、それで海に行ったからだよ。情熱っていうのは、きみがすごく長い間望んでいることで、きみが必ず実行していること。ロベルト、5.4 歳（Reggio Children 2012: 91）

これまでも述べてきたように、ロビンソン幼児学校は、レッジョ・エミリア市で最初にできた幼児学校である。この学校につけられたロビンソンという言葉の意味を、どのように子ども自身が考えているのかをここから読み取ることができる。そして、何より、レッジョ・エミリアの自伝とされる証言集に子どもの声が掲載されていることは、この幼児学校を創ってきた市民の中に、子どもがいることを意味していると言えるのではないだろうか。

そして、この幼児学校の名前には、レッジョの思いが込められ、それが子どもたちに重要な意味を持つことがわかるが、それは他の学校の名前から何うことができる。例えば、2 番目にできた学校の名前が、アンナ・フランク幼児学校で、もちろんのことながら、ユダヤ人であることでナチスによって強制収容所で命を落とした少女アンネ・フランクの名前に由来する。3 番目にできた学校はチェッラというかつての託児所の名前であったが、それはのちに 4 月 25 日幼児学校と名前を変える。先に論じたが、4 月 25 日はレジスタンスによるイタリア解放の記念日である。1970 年代に入って最初にできた市立の乳児保育所の名前が、ジェノエッファ・チェルビィ乳児保育所である。このジェノエッファ・チェルビィとは、戦時下のレッジョ・エミリア市で、レジスタンスのメンバーとしてファシズムと戦った 7 人の息子を亡くした母親の名前である。そして、この一家について、Reggio Children (2012)の中には、一家の在りし日の写真と詳細な記述が掲載されているのである（Reggio Children 2012: 57）。レッジョ・エミリア市において、市民自らが動いて幼児学校を作っていく。その背後にある一つの契機がファシズムに対する抵抗運動であることと、それを誇りにしていることをここから読み取ることができる。

以上のように、多くの人々が共に行動して幼児教育を作り出してきたことは、マラグッツィの思想からも理解することができる。ローリス・マラグッツィは晩年に、幼児教育における権利の問題について、「権利の憲章」として、以下の三つの権利を提示している。

子どもたちの権利

子どもたちには、個人的、法的、市民的、社会的な権利の主体として、すなわち、独自の文化の保持者、構成者として、そしてそれ故に、仲間たち、大人たち、思考、事物、事実や想像の交流する世界の出来事との関わりを通して、積極的に、彼らのアイデンティティ、自治、能力の編成に参加するものとして認められる権利があります。（中略）

親の権利

法に基づく諸原理への自発的合意により、公教育に委託される自分の子どもたちの成長、世話、教育の経験に積極的に参加するのは親の権利です。（中略）

教師たちの権利

子どもたちと親の権利に合わせて、教職員相互や教育学的調整役と学校運営評議会の構成員との間の開かれた検討を通して、教育の内容、目的、実践を定義する概念の枠組みの考究と推敲に寄与するのは各学校の教職員の権利です。（レッジョ・エミリア市乳幼児保育所と幼児学校 2001: 212-213）

この三つの権利を考える上で、重要なことは、この三つの権利が水平的に提示されているところである。すなわち、マラグッツィは、何かを特権的に中心に置くのではなく、異なる立場の人たちが、それぞれが権利を持って参加し、共に行動を起こしていくことが重要であると考えていたことを、ここから読み取ることができる。

6 おわりに：公共のフォーラムとして

本研究では Reggio Children (2012)における 1960 年代に関する記述を中心に、市立幼児学校と乳児保育所の設立にかかわった政治的な動向を、レッジョ自身がどのように認識しているのか検討した。分析の結果、レッジョでは市立幼児学校と乳児保育所の設立にかかわる動向として「市長・議会の役割」「女性たちの運動」「市民たちの関与」の3点を強く認識していたことが明らかになった。そこではとりわけ、女性たちによる活動が強調されていたと言えるのではないだろうか。そして、レッジョの「自伝」には、幼児学校・乳児保育所開設に、市民と政治が連帯し行動したという認識が表れているとも言える。その背景には、レッジョがファシズムに対するレジスタンスの経験がある地域であるという、地域の特徴もまた反映されている。

そうして作られたのが、幼児学校であり、乳児保育所である。それは、異質な人々が集まり、議論し、市民たちの行動と選択によって作られる、いわば「公共のフォーラム」とであると言えるのではないだろうか。

これについてスウェーデンの研究者であるグニラ・ダールベリの発言は示唆的である。「子どもたちは社会的なアクターである。自らの生活を構築し、意思決定することに参加している。と同時に、彼らの周囲にいる人たちの生活やそこで生きている社会を構築し、意思決定することにも参加している。子どもたちは、経験から知を構築するエージェントとして、学びにも寄与する。要するに彼らはエージェンシーを持っているのである」（Dahlberg, Moss & Pence 2013: 52-53）。さらに、「レッジョの思想や仕事では、関係が非常に重要であるため、子どもを自律的で孤立した、文脈から切り離された存在とみなすような「子ども中心」を語ることはない。むしろ、レッジョは、関係—子ども、親、教師、そして社会の間の諸関係—が、あらゆる活動の中心にあって、幼児教育施設は統合された生命体であるとみなされている。（中略）どんなものでもどんな人でも、文脈と諸関係の外側に存在してはいない」（Dahlberg, Moss & Pence 2013: 63）という。

イタリアの歴史的な文脈の中で、多様な人々の自らの行動を通じて、実践されてきたものがレッジョ・エミリア市の幼児学校と乳児保育所である。そして、ダールベリたちの主張にたてば、レッジョ・エミリアの幼児学校は、その文脈にあって、構築されてきたものだ。そこでは文脈に固有の、ヒト・モノ・出来事との出会いと対話の中で幼児学校が構築されてきた。だとするならば、異なる文脈にいる私たちは、レッジョ・エミリアでなされた議論と対話しながら、私たち自身の選択をすることが求められることになる。何より、マラグッツィやモスが言うように、幼児教育は政治的な実践に他ならないのだから（小玉 2023）。

【付記】

本論文は、藤谷未央、「1960年代のイタリア社会とレッジョ・エミリア市立乳児保育所／幼児学校 その1」および、小玉亮子、「1960年代のイタリア社会とレッジョ・エミリア市立乳児保育所／幼児学校 その2」（日本保育学会第76回大会、熊本学園大学 2023.5.14）の二つの口頭発表と、これに加えて、小玉亮子、「幼児教育と公共性—レッジョ・エミリア市立幼児学校の思想と実践から—」（日本学術会議心理学・教育学委員会乳幼児発達・保育分科会、日本学術会議心理学・教育学委員会排除包摂と教育分科会主催シンポジウム 子ども政策の総合化を考えるⅢ：保育・幼児教育の公共性、オンライン開催、2023.9.24）でシンポジストとして報告したものを、統合してまとめたものである。明確な分担はないが、全体として、藤谷のレッジョ・エミリア市の1960年代に関する歴史分析に、小玉が加筆する形で執筆を行なった。

【註】

- 1) 本書の書誌情報は、以下である。Preschools and Infant-toddler Centres- Istituzione of the Municipality of Reggio Emilia and Reggio Children, 2012, *One City, Many Children: Reggio Emilia, a History of the Present*, Reggio Emilia: Reggio Children. ただし、引用の都合上、著者名は略称の Reggio Children と表記した。なお、本書の目次は、1860年代以降を扱う章のタイトルが順に「前史 1860年-1945年」「再生のユートピア 1945年-1963年」「新たな始まり 1963年」「1970年代 成長の時代」「1980年 目が壁を越えたら」「1990年 対話のなかの知識」「2000年 境界線を越える」となっている（Reggio Children 2012）。
- 2) なお、2024年現在では、日本と同じ意味での公立ではなく、その運営が市民の手に委ねられているものもある。
- 3) この時期のイタリアの教育改革の動向の一端は、田辺（1972）に詳しい。
- 4) なお、以下の引用文の中で、英語版 83 頁では、レンツォ・ボナツツィが「1972 年まで市を率いた」と書かれているが、正しくは 1976 年までであり、英語版の記載の間違いであることが判明したため、引用文の翻訳に際して 1976 年に変更した。
- 5) Colarizi（2000）によると、1960 年タンブローニ政権が成立すると反ファシストを掲げる人たちがこれに抵抗し、パルチザン協会の旗を掲げた人々がデモを行い、それが全土に拡大したのであるが、他方でそれを鎮圧しようとする警察と激しい騒乱となった。その時にレッジョ・エミリアでは 20 歳の青年 5 名が命を落とした。彼ら「ストライプ・シャツの少年たち」は「流血の日々の主人公」となり、そこでは新たな政治主体としての若者の誕生が論じられた。
- 6) 山手は、全国母子事業団では女性ファシスト党員がボランティアで活動にあたっていたことや、ムッソリーニが「1927 年 5 月の議会演説で母子事業団の活動を絶賛した」ことを指摘し、この事業団とファシズムの関係を論じる。ムッソリーニは人口増加を国家目標に掲げており、良妻賢母が理想の女性像とされていたという（山手 2017: 181）。
- 7) 柴山も全国母子保護事業団の体質が「中央集権的、保守的」であったと指摘する。さらに柴山は、イタリアで 1950 年に成立し、50 歳以下の既婚女性を 30 人以上使用する雇用主に乳児室または保育所をつくる義務を定めた「母親労働者の肉体的、経済的保護法」について論じる中で、「企業側は一貫してこの法律の履行を拒み、サボりつづけ、母子保護協会はこれをあと押ししてきた」、「戦後イタリアの保育行政を指摘するとすれば、まさにこの両者の責任は重大であった」と指摘する。なお柴山は本論文における「全国母子保護事業団」を「母子保護協会」と訳している（柴山 1979: 274-275）。
- 8) 柴山によれば、このデモの直前にあたる 1971 年 2 月には、全国母子保護事業団のスキャンダルが国民に露呈された。具体的には、全国母子保護事業団の協定保育施設が「ルーズな監督」により 2 人の子どもを死亡させたこと、ローマの施設で子どもたちを虐待していたこと、さらに、子どもがいない施設を書類上の協定保育施設として登録し、国家の補助を受けていたという「公金横領」であった。これにより全国母子保護事業団に対して「世間は怒り心頭に発し」、「情勢は一転して革新陣営に有利に展開」していったという（柴山 1979: 283-284）。
- 9) 以下で引用したジャローニとルスアルディの証言は、以下のオンライン映像の字幕を参考に翻訳したものである。Lingenauer, S., 2018, *The women and the schools of Reggio Emilia*, (2023/9/19 閲覧, https://www.youtube.com/watch?v=ivLAQ_kbNB8)。このオンライン映像は、三巻の DVD から抜粋されて制作されたものである。一連のリンゲナウバーによるレッジョ・エミリアの女性史プロジェクトについては、ウェブサイト Visionen für die Zukunft: Eine Dokumentation von Sabine Lingenauer

(2024/05/19 閲覧, <https://reggio-emilia-research.com/?L=0>)を参照されたい。

【引用文献】

- Colarizi, S., 2000, *Storia del Novecento Italiano: Cent'anni di entusiasmo, di paure, di speranza*, Milano: RCS Libli S.p.A. (村上信一郎監訳, 橋本勝雄訳, 2010, 『イタリア 20 世紀史』名古屋大学出版会.)
- Dahlberg, G., P. Moss, and A. Pence., 2013, *Beyond Quality in Early Childhood Education and Care: Languages of Evaluation 3ed*, Routledge. (浅井幸子監訳, 2022, 『「保育の質」を超えて: 「評価」のオルタナティブを探る』ミネルヴァ書房.)
- 浜田真一, 2022, 「ローリス・マラグッツィの思想と乳幼児の学びへの挑戦——レッジョ・エミリアの保育」幼児教育史学会監修, 小玉亮子・一見真理子編著『幼児教育史研究の新地平 下巻——幼児教育の現代史』萌文書林, 232-259.
- 星三和子, 2021, 「イタリアの乳幼児教育の動向——0歳から6歳の統合制度をめぐる」『保育学研究』59(2): 101-112.
- 伊藤武, 2016, 『イタリア現代史——第二次世界大戦からベルルスコーニ後まで』中公新書.
- 小玉亮子, 2020, 「さまざまな歴史とさまざまな街——世界の幼児教育におけるレッジョ・インスピレーションの(不)可能性」『発達』162: 30-35.
- , 2023, 「図書紹介『「保育の質」を超えて: 「評価」のオルタナティブを探る』」『幼児教育史研究』17: 84-87.
- Lingenaber, S., 2018, *The women and the schools of Reggio Emilia*, (2023/9/19 閲覧, https://www.youtube.com/watch?v=ivLAQ_kbNB8)
- モス, P. & 佐藤学, 2020, 「レッジョ・エミリア再考」『発達』162: 14-20.
- Reggio Children, 2012, *One City, Many Children: Reggio Emilia, a History of the Present*, Reggio Emilia: Reggio Children.
- レッジョ・エミリア市乳幼児保育所と幼児学校/田辺敬子・辻昌弘・木下龍太郎訳, 2001, 『イタリア/レッジョ・エミリア市の幼児教育実践記録 子どもたちの100の言葉』学研.
- 里見実, 2015, 「ローリス・マラグッツィとレッジョ・エミリアの幼児教育——Alfredo Hoyuelos Planillo: Loris Malaguzzi biografia pedagogica をめぐって」『國學院大學教育学研究紀要』50: 153-184.
- 佐藤学, 2001, 「子どもたちの100の言葉 訳者解説 レッジョ・エミリアの教育とその背景」C.エドワーズ・L.ガンディーニ・G.フォアマン編, 佐藤学・森真理・塚田美紀訳『子どもたちの100の言葉——レッジョ・エミリアの幼児教育』世織書房, 497-508.
- , 2020, 「レッジョ・エミリアの教育とピーター・モス教授に学ぶ教育学の新しい物語り」『発達』162: 21-25.
- 柴山恵美子, 1979, 「訳者補足(2) 母親労働者保護法の改革と保育所法の獲得」N. スパーノ& F. カマルリング著, 柴山恵美子訳『イタリア婦人解放闘争史——ファシズム=戦争との苦闘 50年』御茶の水書房, 269-290.
- 田辺敬子, 1972, 「イタリアにおける後期中等教育の現状と革新勢力の改革」『国民教育』11: 166-175.
- 山手昌樹, 2017, 「ファシズムの時代」土肥秀行・山手昌樹編著『教養のイタリア近現代史』ミネルヴァ書房, 177-190.

